

インフルエンザ・ワクチン

ワクチンをうったのに・・・インフルエンザにかかった、という人がたとえば当院でインフルエンザの診断を受けた人の約1割にいる。その理由を考えてみよう。一般論を書きだすと混乱するから、話をインフルエンザにしばる。

インフルエンザ・ウイルスが体内に侵入すると、約2週間くらいで、「抗体」ができる。この抗体の種類は5種類あり、うちIgGとIgAが問題になる。IgGは、もともとふつうに反応する抗体で、IgAは唾液などの体液の中に分泌される。

だから、インフルエンザ・ワクチンを吸いこむと、まずIgAが反応するはずなのである。

ところが、ふつうインフルエンザ・ワクチンは、皮下か筋肉注射をするから、つまりいきなり**身体の中に入れる**ものだから主にIgGが産生されることになる。だから鼻やのどにウイルスが入ってくるとIgAが反応しないといけないのに、その量がきわめて少ないからインフルエンザにかかってしまうことがあるのである。ただし、かかってしまうとIgGが反応するようになるから、ワクチンをうたなかった人よりも、重症化することが少なくなる。(ワクチンうったのに・・・という人は翌年はワクチンをうたないようだ。)

ワクチンで、たしかにインフルエンザにかかる割合は少なくなる。だからワクチンを接種するのは賛成である。米国などでは、注射ではなく、鼻腔や口腔に、IgAを産生させるような投与方法を行なっているらしい。

ただし、外国のワクチンと日本のワクチンの単純な比較はできない。精製度などが異なるからである。

かつて、フランスのマテー（世界で最初に骨髄移植に成功した人）が、BCGが急性白血病に効く、と報告した。世界中で追試をしたがほとんど効かなかった。国際血液学会でこれを指摘されると、彼は平然と「BCGは、パリのパスツール研究所で作られた、精製度の低い、粗雑な BCG でないと効かない！」と開き直ったものである。つまり、たとえば日本のような精製度の高い BCG ではきれいすぎて効かないという。（本音は、**オレ**が投与しないと効けへんねん、といたいのである。）えらいうけてたで。まあ名物男やし。

小児にはインフルエンザ・ワクチンは効かない、という報告はある。ただし、前もって、たとえば 10 万人ずつ選んで、片方にはワクチンをうち、片方にはうたない、という取り決めをし、抽選でどちらに組み込まれるかを決定する。うてへんのがわかったら違った反応がでるかもしれないから、同じように注射はするが、その中身はワクチンではないものをいれておくのである。これで比較検討すれば、効くか効かないかがわかる。で、これを何年か（毎年ワクチンの中身が変化しているから）繰り返して結果をだす。そうすれば、効果があるかどうかはわかる。これが科学的論拠（エビデンス Evidence）というものである。・・・数百人程度のデータで「効かない」と大騒ぎしているのもいるが間違っている。

小児というのは何歳までか、の判断も迫られる。